

No.119

公民館だより

平成15年11月

宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

ふれあい

由良地区公民館長 飯澤登志朗

第五次宮津市総合計画のなか
に、子どもがのびのびと育つま
ちづくりプランとして、

◎健全な子どもを育むにふさわ

しい健全な社会の形成

◎地域社会の子育て機能の充実

◎豊かな人間形成、社会性を育

む地域社会に開かれた学校づ
くり

があります。学校週五日制のも
とでの地域・家庭・学校との連
携の強化に努めなければなりま
せん。

由良地区には伝統的な行事を
含め、たくさんの行事がありま
すが、子ども抜きでは考えられ

ないものが多く見られます。

最近の中学生は……高校生は、
若いものは地域の行事に参加し
ない、こんなご意見をよく耳に
します。

去る九月七日平成十五年度由
良地区運動会では前回に続き、
小学校や中学校の積極的な協
力もあって、盛大に開催するこ
とが出来ました。

今回、開催にあたり公民館が
取り組んだ目的に地域の子ども
と、大人とのふれあいの場を提
供することがあります。地域の
子どもたちが各部の応援席で、
大人と一緒に心一つに

してふれあいの輪を拡げること
を願っていました。

各自治会等の呼びかけもあつ
て中学生の活躍が目立ちました
が、過去にダラダラした行動が
問題となったこともあります。

また公民館研修会等で「地域
行事に中学生を如何に参加させ
るか」といったテーマが分科会
で取り上げられたこともあります。

今年の運動会で、マラソンに
大勢の中学生が出場し、各部の
得点に大きく影響する活躍があ
りました。地域に溶け込んだ行
動を嬉しく思います。

最近、犯罪の低年齢化、凶悪
化がメディアに載らない日があ
りません。一方子どもが被害者
になる事件も連続で起きて、そ
の対応にも注意が必要です。

長崎幼児殺傷事件では、中学
生に保護処分が決定しましたが
大変不幸な出来ごとでした。

一九九四年に〇君がはじめに
耐えかねて自殺したとき「私も
いじめられた」という声が様々
なメディアに載り、その声は子

どもから老人まで広い世代にわ
たっていたことを考えると、い
じめは現代の事象ではなく以前
からあった事実なのです。

「ケンカ」したけど今のよう
に陰湿ないじめはなかった、と
年配者は言います。最近「キ
レる」と表現されていますが、
どこかに退路があつた昔と今の
違いなのでしょう。

由良地区では、運動会の他に
由良岳登山や新しい伝統を作る
うと世話人が頑張っている「子
供地蔵盆」そしてこの号が発刊
される頃には、終わっている秋祭
等ふれあいの場は色々あります。

平成十三年にあいさつ運動推
進協議会が結成されて標語が募
集されました。

・あいさつが飛びかう町に
明るい未来

応募のなかの一つですが、少
子高齢化が顕著に進む今日、地
域の将来を担う子どもたちを住
民主体で守り育てる為にも『ふ
れあい』を大切にしていきたい
と願っています。

行事報告

主 事 枝 川 隆 亮

◎六月二十二日(日)

四部対抗バレーボール大会

恒例のバレーボール大会も今年で24回目を迎えました。

年々、若い人が参加する様になり、活気が見られます。

試合結果を報告します。

男子の部 女子の部

優勝 三部 三部

準優勝 四部 二部

三位 一部 四部

四位 二部 一部

女子の優勝は三部が平成二年より14回連続しております。

他地区の奮闘を期待します。

◎八月二十四日(日)

盆踊り大会(地藏盆)

盆踊り大会は会場を松原寺に

移して三年目、年々踊り手が増加しています。

今年も、中西満さきさんをリーダーとして、「由良踊り保存会」が発足し、数回の練習を重ねておられます。

当日は、午後突然の雷雨がきて会場は水びたし、中止も考えましたが、スコップ、バケツなどの人海作戦により水を除去、開催することができました。

約三百名の踊り手が、晩夏の夜のひとときを楽しむことができました。

◎九月七日(日)

区民運動会

冷夏と言われた今年の天候も

九月に入ると途端に晴天が続き、

連日30度を越す猛暑の中、二年

に一度の区民運動会が開催されました。

今回は、若いお母さん達の活躍が多く見られ、大会を大いに盛り上げました。

特に二部の大活躍が見られ、総合二位、リレー優勝と大健闘でした。

以下、成績は次のとおりです。

総合成績 リレー成績

優勝 三部 二部

準優勝 二部 三部

三位 一部 四部

四位 四部 一部

◎子どものびのび体験活動

「京鹿の子紋」体験学習

平成十四年度からの学校完全

週五日制に伴い、地区内の子どもに体験活動の機会をつくり、

より充実した経験をつませるため、公民館では今回「京鹿の子

紋」の体験学習を実施しました。

小学四く六年生を対象として

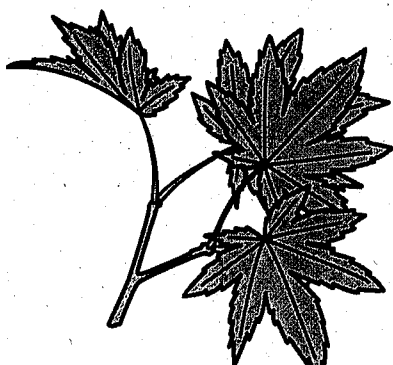
募集をし、三十一名が体験学習

をしました。

針を使用した子どもが少ない中、振興協同組合の講師の先生の指導により苦勞して完成させ、その仕上がりを見事に感嘆の声があがりました。

作品を敬老の日の祖母にプレゼントするという児童もあり、盛り上がりを見せていました。

伝統工芸に対する認識が少しは深まったと思いますが、約二時間で作品を完成させる無理があり、もう少し時間の延長が望ましいと考えます。



庄内由良との交流

由良小学校長 倉野英明

由良地区が庄内由良と交流していることは、以前から何かのたよりで知っていました。が、学校もその一員として、当初から受け入れのための準備会に参画していることは、つい知りませんでした。

六月三日に第一回の打ち合わせ会の知らせがあり、由良の里センターに行きました。そこで、来訪日時、訪問の人員、過去の交流経過、受け入れ態勢や準備、役割分担等が話し合わせられ、交流に寄せる相互の地域の方の思いや熱意がひしひしと伝わってきました。この交流を大事に育てようとする地域の方々の気持ちを知ることができました。では、学校としてのこの交流をどう教育に生かしながら取り組むかといったことが頭をよぎり、早速、学

校に持ち帰り、教職員で話し合いたいと思いました。

学校では、三年に一回相互の地域を訪問し、交流を深めあっているこの取組の他に、庄内(山形県)の由良小学校と絵画や文集、習字などの作品を交換したり、行事等の折りには、インターネットでメールを送ったり、それぞれ地域の特産品(庄内由良 サクランボ・丹後由良 ミカン)を送ったりしています。今年も、六月にサクランボが届き、給食の時間に、みんなでおいしくいただきました。

この間、何回かの会合があり、訪問は当初、八月八、九日でしたが、九、十日に決まり、訪問団は、児童十一名、大人十二名の計二十三名が分かってきたのと、受け入れる由良地区の態勢

や準備、当日の日程等がほぼ決まってきました。

その中で、学校の役割は、訪問団が来られた午前の体育館で催す、交流会の内容を考えることでした。

次のように組んでみました。交流のねらい

由良地区の一員として、相互の地域の歴史的な繋がりを理解すると共に、訪問や作品等を通して交流を深め、友好の輪を広げる。

交流会

第一部

一、歓迎あいさつ 校長

歓迎の言葉 児童会長

二、由良小学校の紹介

三、フォークダンス

第二部(六年生同士の交流)

一、自己紹介

二、ゲームなど

計画を立ててはみましたが、学期末のため、なかなか交流会のことができず、フォークダンスも婦人会の方に無理を言っ

終業式の日には教えていただいたり、小学校の紹介や第二部の内容も夏休みに入ってから具体的に取り組むといったことでした。

また、明日やってくるという日になって、台風一〇号も接近するといったハプニングもあり、庄内由良小の校長先生と携帯電話で状況をやりとりしながらの来訪でした。

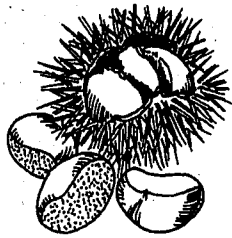
当日は、警報が出ていたため、午前と午後の日程を入れ替え、午前中に宮津の観光地である日本三景の天の橋立を廻り、午後に交流会を持ちました。

最初のあいさつで、両由良の地域の方がこの交流を大切にしていること、相手の地域の生活や風習、習慣の違いは、それぞれの地域には気候や風土、自然環境に根ざした文化や生活があること。違いは、自分のふるさとである由良をよく知ることによって分かること。この取組が相手を思いやる心や地域を愛する心につながることを話し

ました。

勇壮な由良太鼓の歓迎に始まり、映像を使った児童会役員による学校の紹介、庄内由良小の疲れを吹き飛ばす花笠踊りの熱演、みんなで踊ったフォークダンス、和気あいあいと親睦を深めた二部の六年生同士の交流と、短い中にお互いの良さを発表し、更に友情の輪が広がった交流会でした。

次の朝、お互いの地域の方々が兄弟のような親近感で別れを惜しむ姿や六年生の前からの友達のように言葉を交わしている光景を見て、庄内由良、丹後の由良の人達の交流に寄せる思いや温かい人柄がにじみ出ていました。これからも、交流が末長く続くことを願っています。



交流会

八月九日、この日は、丹後由良小学校と庄内由良小学校の交流会です。

三年前、今の中三の人が庄内由良を訪問しました。そして今年、庄内由良の訪問団がぼくたちの学校に来ます。

八月九日、丹後由良小学校は登校日です。そして、庄内由良の訪問団のかんげい会です。ぼくはそのかんげい会の中で、丹後由良のしよう介をします。ぼくはドキドキしながら言ったけれど、ちゃんとできました。他にも由良太鼓を発表したり、フォークダンスなどをしました。でも、中でも、庄内由良の人に花がさおんどをおどってもらったときは、はく力が、すごく伝わってきました。そして六年生だけの交流会。

六年 磯田良介

自己紹介をしたり質問をしたりしました。自己紹介では、全然覚えられなかったけど、ゲームをして遊んでいくうちに仲良くなつて、名前も覚えられました。

次の日みんな帰ってしまったって残れなかったけど、仲良くなれて良かったし、はずかしがらずにしゃべることができたのが、一番うれしかったです。

このことは、すごい思い出になりました。知らない人でも、いっしょに行動すれば、自然と仲良くなれるというのが実感できて良かったです。



良かったです。

庄内由良との交流

六年 尾崎 華

三年に一回の山形県庄内由良小学校との交流会。遠くはなれた所で育ち、かん境も経験していることもちがう人達との対面は、私にとって、きん張感と不安と楽しみでいっぱいだった。

由良のたいこでみなさんをむかえ、由良小学校の紹介、フォーークダンスなどをした。フォーークダンスは、地域のみなさんも加わり、とつても楽しそうだった。庄内由良小学校六年生のみなさんには、花がさ音をを見せてもらった。きれいにかさが回ったりなめらかな動きだったり。本格的なおどりにおどろいてしまった。六年生どうしの交流では、おたがいの由良のことをたくさん教え合った。遠泳はサメが出たので中止になったとか、庄内由良小学校全校人数が八十一名で

私達と同じということなど、おどろくことばかり。とつてもいい勉強になった。気が付くと、みんなが笑顔になっていて、こんなに早くいっしょに笑い合うことができるのは不思議だな、と思った。

初対面なのに、少し話をした。遊んだりすると、なんだかなつかしい気がした。交流会をしている時は、このまま時間が止まってくれたらいいなと、強く思っていた。

この交流会で、たくさん友達をつくることができたし、庄内由良小学校と丹後由良小学校のみんなの関係が、また一つ親しくなれたのではないかな、と思う。いつか、私が庄内由良小学校に行つて、ちがう自然にふれ合つてみたい。

交流会

六年 浜本 涼

京都から東京より長い道のりを、バスで長い時間をかけて、由良小学校に来られた庄内由良の人たち。五、六年の代表者が、かんげいの意味を込め、たいこをたたいた。ほくもその中の人だった。たいこも終わり、みんながきん張していく中で、スゲジュールは進んでいく。

フォーークダンスの時は、長旅でつかれているにもかかわらず、みんな笑顔でほつとした。

そして、第二部。今度は六年生だけの交流。一人一人しゃべる事が多くなる。最初はみんなきん張していたようだったが、時間が経つにつれ、笑いが多くなった。きん張がほぐれた証だった。ゲームをしていた時は本当に心から笑い合えた。フルネームで名前を覚えた

人はいなかった。でも、そこがとつてもロマンチックだ。名前を覚えられなくても、お互いに信らしてきた、友達。時間的に一緒だったのは少しだった。けど、どちやんとお別れもできた。でも、今思い出すと、あの時もうとしゃべつたらよかつたと、思うことがある。だけどそれが人生。やり直しのできないのが人生。やり直せないから、思い出が出来る。今回の交流も思い出になった。

それと、からからせんべいに入っていたおもちやをいつまでも大切に、交流会の形見としてとつておきたいです。



庄内由良訪問団をお迎えして

四方 寿朗

千四百年前の蜂子皇子の伝説によつて友好の盟約を結び、お互いに三年毎に交流を続けてい
る庄内由良の訪問団を、今年
は私たちの丹後由良が迎える番
である。この四月以来、北野自
治連会長を中心に、自治会、小
学、育友会、観光協会、婦人会、
歴史をさぐる会などが、度々会
合を重ねて歓迎の準備を調べて
来た。これまでの行き帰りはJ
Rの列車であったが、今回始め
て大型バスを利用し、八月九日
午前八時、由良へ到着の予定だ
つた。

ところが大変なことになった。
七日夜になって、大型で強い台
風十号が、発達しながら鹿児島
附近を時速二十キロで北東に進
行中。中心付近の最大瞬間風速
四十メートル、半径二十キロメー

トル以内は、風速二十五メー
トル以上の暴風域と言うではない
か。六年に一度の大事な日に、
こんな大きな台風が来なくても
よいのに。事態を心配しながら
八日の朝を迎える。鶴岡から電
話が入り、「予定通り午後六時庄
内由良をバスで出発します」と
のこと。早速自治会、小学校な
ど関係者が集まって協議した。
台風警報が出れば、児童は自宅
待機、学校行事は許可されない。
丹後の児童も勿論同じ。予定を
一日延期すれば、台風一過で何
とかなるかも知れない。とにか
く状況を見ながら先方からの連
絡を待つ。九日朝の迎えにつ
いては、改めて連絡するから、
それまで自宅で待機ということ
になった。

台風といえは私は子供時代、

京都の小学校で大変恐ろしい経
験をした。昭和九年九月二十一
日関西を襲った室戸台風は、死
者三千余、全壊、半壊、流出家
屋八万以上、その最大瞬間風速
は六十メートルに達した。二年
生だった私は何時ものように登
校した。天気予報はあつたと思
うが、記憶に無い、当時は現在
のように少々の事で学校は休ま
なかつた。その日もクラス全員
が登校していた。授業が始まる
間もなく猛烈な風が吹き出した。
校舎は古い木造平屋建て、先生
の指示で各自机の下へ、頭に座
布団を載せて潜り込んだ。風が
吹くと窓硝子がガタガタと大き
な音をたて、今にも割れそう。
その度に両手で耳を塞ぎ、目を
閉じた。「大丈夫」と言う先生の
言葉を信じて泣く者は居なかつ
た。

恐怖と必死の戦いが一時間も
続いただろうが、漸く風は治まっ
た。記録によると学校校舎の倒
壊も多く、教員生徒の死者は七

百五十人とある。当時学校に電
話があつたと思うが、庶民の家
にはそんなものは無かつた。警
報は出たかもしれないが、当時
のラジオは雑音がひどくて聴き
取れなかつた。風が治まって下
校したが、親が迎えに来た記憶
など無い。現在なら教育委員会
や育友会など、大変な騒ぎになっ
ていただろう。昔が全て良かつ
たとは思わないが、今はとにか
く何によらず、少し大げさ過ぎ
る。

話を元に戻す。八日夕方、こ
ちらでは何時もより少し強い風
が吹く程度。しかしテレビの情
報は、現在、台風は室戸岬の南
西約七十キロ、時速二十キロの
速度で北北東へ進行中、このま
ま進めば西日本を横断して、北
陸の日本海へ抜ける見込み。既
に京都府全域に暴風警報発令中、
しかも高知では最大瞬間風速五
十五メートルを記録したと言う。
夜中の情報でも進路は予想通り。
何も連絡はないがこれでは訪問

団の来訪は無理。明日はどうせ
休診、私は久し振りの朝寝坊と
決めて床についた。

九日午前七時、電話のベルで
飛び起きた。「今、朝食をすまし
たところ、これからそちらへ向
かいます」「え、今何処ですか」

「西舞鶴の駅前です」……丹後
由良からの連絡かと思ったら、
庄内由良からだ。さあ大変。北
野会長と「さぐる会」の中西君
にとりあえず電話で連絡して、
顔も洗わず車を山椒太夫屋敷跡
へと走らせた。

屋敷跡へ着くと同時に、対向
車線から来たバスが止まった。
訪問団だ。やっと間に合った。
私は車を降りて何食わぬ顔で挨拶
を交わした。庄内の小学生も
来ている。その内、出迎えの諸
君が駆けつけてくれた。「よし、
行事は予定通りだ」もみじ公園、
「蜂子皇子船出の地」などの案
内は、仲間に任せて私は直ぐ里
センターへ引き返した。

北野会長、小学校校長など関

係者で相談、午前と午後を入れ
替えて、予定の行事を実施する
ことに決まった。訪問団は里セ
ンターで暫く休息の後、ボデー
に大きく東北地方の地図を画い
た観光バスに、地元の我々も乗
せてもらって橋立観光へ出発す
る。

途中如意寺、由良の戸碑、森
鷗外文学碑などは、時間の関係
でバスの中から、又、通過する
栗田、宮津、岩滝等のガイドは
「歴史をさぐる会」で。府中ま
で直行。

バスを降りて籠神社への参詣
を済ませて、ケーブルで傘松公
園へ登る。生憎の曇り空で、折
角の橋立も霞んで見える。股の
ぞきもそこそこにして、再び府
中へ降りる。前もって先発隊に
切符を用意してもらったお陰で、
直ぐ出発の船に間に合った。雨
上がりの橋立を左に見て船は文
珠へ到着する。新装成った回転
橋を渡り、大天橋の上から松並
木を眺めるだけ、残念ながら時

間が無いので橋立散策はこれで
終わりとする。土産物屋でたく
さんの買物物を済ませ、バスで
由良への帰路に着く。

車中で先の大戦中、天橋立を
切断しようとした軍部に対して、
短刀を懐に決死の覚悟で計画撤
廃を直訴した、三井長衛門宮津
町長の話を披露して庄内由良の
皆さんの共感を得た。

車の渋滞にも会わず、正午前
由良へ到着、国民宿舎で昼食を
済ませ、午後は体育館で二つの
由良小学校同士の交流会が開か
れた。

先ず子供の打つ勇壮な丹後由
良の太鼓で訪問団を歓迎する。
次にスライドを使つての学校活
動の紹介。庄内由良の生徒によ
る元氣一杯の花笠踊り。記念品
の交換。そして最後は白、赤、
緑の鮮やかな衣装の若い婦人会
四人組の指導による、子供も大
人も一緒になつてのフォークダ
ンスに、会場全体が大いに盛り
上がり、交流会の幕を閉じた。

午後六時半から国民宿舎で懇
親会を始める。最初に、カメラ
が酔わない前に、全員揃つての
記念撮影を済ませる。型どおり
の乾杯が終わると、後はもう無

礼講。そこ此処で話が弾む。数
人で賑やかなグループもある。カ
ラオケの後、宮津踊りが出て、
最後は「めでためだ」で漸く
お開きとなる。昼間とはまた違つ
た色々な交流が出来たと思う。

翌日午前八時半、小学校玄関
前で、記念写真を撮り合い、ま
た花笠踊りが飛び出す。名残は
尽きないが、三年後の再会を約
束して最後のお別れとする。

私たち「歴史をさぐる会」の
数人は、最後の見学場所舞鶴引
揚記念館まで案内を兼ねてお見
送りする。五十余年前、ボラン
ティアで援護局の業務を手伝い、
引揚船にも三度乗船の経験を持
つ私が説明役となる。

舞鶴港は先の大戦後、軍港か
ら引揚港へと変貌し、主にソ連、

中国などから六十六万余人を迎へ入れ、日本民族が初めて受けた敗者の試練を最終的に処理した港である。昭和六十三年この記念館が完成し、引揚げの歴史を後世に伝える貴重な資料や写真などを展示している。私のように戦争を少しでも体験したものにとっては見ていて、胸の痛くなるような物ばかりである。今の若い人々は何を感じたのだろうか。戦争の悲惨さと平和の尊さを改めて認識してくれたものと信じたい。

約一時間の見学を終えて、私たちが帰路の安全を祈りつつ、北陸へ向かうバスを見送る。これですべての行事は終わった。台風の来襲で、最初はどうなる事かと心配したが、蜂子皇子のご加護のお陰で、台風の最中、無事歓迎行事を終了することが出来た。振り返ると、庄内由良の皆さんが、八日の夕方台風の進路に向かってバスを出発させられた、その素早い決断がズバ

リ正解だったと考える。その時の事情を庄内の五十嵐校長にお尋ねしたところ、「出発時、山形には未だ警報は出ていなかった」と事も無げに答えられた。私は東北人の懐の広さと率直さを羨ましく思った。

丹後の子どもたちも実に頼もしかった。母親に連れられて私の診療室へ来ている時とはまるで別人のようだ。「子どもが一人で前へ進むようとしている後ろから、そのスカートを踏んでいるのは誰か」と問いたたい気がする。

今回地元元丹後由良も、自治会を中心に、各種団体がそれぞれ役割を分担し、一致協力して、歓迎行事を立派になし終えたと思う。お世話になった皆さん、本当に有難う。今後もこの交流が末永く続くことを祈っている。
(十五・十・十)



しぼり染め体験

六年 中西可奈絵

由良の里センターで、私は初めてしぼり染め体験をしました。しぼり染めを教えてくださいました先生は四人です。先生方のあいさつを聞いて、しぼり染めをする布のからを選びました。私は、細い葉がついている花の布を選びました。上手に出きるかな、それだけが心配でした。

まず、私は花がらの部分を、針でぬきました。細かくぬつても、おおまかにぬつてもいいと思うので、私は細かくぬうことにしました。花には、しるしがついていたので、分かりやすかったです。でも私は、指を何度もさしてしまいました。やっと花がぬえて、次は、葉の部分をしました。これは、よく分からなかったなので、先生方に、よく教えてもらいました。これも針で

ぬうけれど、なれてきたのか、一回も針で指をさしませんでした。とてもうれしかったです。

次に教えてもらったのは、糸をしぼってまく作業です。この作業も先生につきっきりで教えてもらいました。先生のやる事をよく見て、やりました。糸を丸結びにしてからひっかけて、糸が切れないようにひっぱって糸を、しわしわのドライフラワーのような花にまきました。花は二つあったので、もう一つの方は自分でやりました。自分一人でやった方は、ざつで、何これ、と思うほどでした。でも、やり直すと時間がかかるので、葉の方に向つりました。これも同じようにして、引っぱると、しわしわの小さな葉になりました。こっちは、糸でしぼらなくていいので、私にとっては、少し気楽でした。

さて、最後の仕上げ。これでしぼり染めになる。ワクワクして色を決めました。私は、ローズという赤っぽいピンクにしました。待ちきれないので、かけ足で調理室に駆けこみ、調理室にいた先生に、ローズ色にする大きななべに布を入れてもらいました。そして、三分後、布を取り出してかんそう機に入れてもらいました。かんそう機から自分のを取り出して糸を取り、見てみると自動的に満足しました。

またもとの部屋にもどり、ドライヤーをかけました。他の人は、アイロ

ンをかけていたけど、私は、ドライヤーでかわかすだけになりました。私は、その方が気に入りました。とても楽しかったので、もう一度したいと思いました。



絞り染め体験

六年 浜崎 麻依

九月十三日に、由良の里センターで絞り染め体験がありました。私が行くと、けっこうたくさんの人が来ていました。みんなが来て、初めにどんなもようの布にするかを決めました。私は、一番簡単な布にしました。

まず初めに、布を針でぬいました。そこまではだいたいの簡単にできていたけど、次の、針でぬったところを糸でぐるぐるまいていくのがすごく難しかったです。一番簡単なもようの布でもこんなに難しいということを知って、おどろきました。

なかなかできなかったのですが、その作業はほとんど大人の教えてくれる人にやってもらいました。その大人の人がやっているのを見てみると、大人の人はあんなに難しいことを、簡単そ

うにやっていたので、おどろいたし、すごいなあと思いました。そして、次はいよいよ布を染める作業に入ります。

ローズ、フジ、水色のなに色にするかを決めました。どの色もいい色で、どの色にしようかすごく迷ったけど、私はフジのむらさき色に染めることに決めました。白い布がむらさきに染まると思うと、すごく楽しみでした。

それで、大人のの人に染めてもらって、ドライヤーでかわかしました。

かわいたら、糸でまいたところをとりました。糸できつくしぼってあったので、とるのが大変でした。

すこしは大人のの人にやってもらったけど、針でぬったところ

を糸でまくのよりかは簡単だったの、で、だいたいは自分でできました。

そして、仕上げにアイロンをあててしわをのばしました。すると、ハンカチらしくなりましだ。真っ白だった布が、きれいなフジのむらさき色に染まったので、私は最初から布がむらさきだったように思いました。きれいなむらさき色に染まると、うれしかったし、絞り染め

染めもの

九月十二日に「かこの染め」という染めものの文化を学びました。

私は、染めものと聞いてふくざつな気がしました。いいよだ。初めに、がらを選び、点線にそって布をぬいました。

次に、ぬった糸をむすんだと

体験に来てよかったなあと思いました。

それは、少し大人の手に手伝わってもらったりもしたけど、自分たちで教え合いながら、いい布ができたからです。

初めての体験で、難しかったけど楽しかったです。もう、こういう体験ができるときはあまりないと思うけど、できたらまたしたいなあと思いました。

六年 実川 季美花

ころを手で持ち、糸を引きました。すると、まるでだんごのようにな丸くちぢみました。このような作業をほどこしていきました。やっていると、思ったより難しいものだとはつきりと感じとれました。

私がやっていた思ったことは、現代の世までどうしてこの文化

が残っていたのかということですね。染めもののようなくぐれた文化は、昔、他の国から来た人達が伝えた米づくりからすべて始まったのでは……。そんなことを頭にうかべながら、せっせと手を動かした。

やっと、しぼる作業までが終わった。やり始めてから、一時間もたっていた。私は、まさかこんなに時間がかかるものとはまったく知らなかった。ともかく、時間がかかることと、人が初めてするとよけいに時間がかかることは、よくわかった。

やっと次だ。いよいよ染める。色はピンク、むらさき、青とある。私は、ピンク（ローズ）で染めた。私達が液にひたしてはいけないので、担当の人にしてもらった。きれいな色に染まって、ドライヤーでかわかした。中を見てみると、あとがくつきりつついていて、すばらしい作品にしあげりました。アイロンをかけてもいいけれど、染めた

感じがしないので、アイロンはひかえた。

染めものの文化を知り、実際に染めものを体験できてよかったですと思います。めったにこんなところでできないことをしたので、よかったです。また染めものがあつたら、してみたいと思います。

絞り染め体験

九月十三日に由良の里センターで、絞り染め体験があり参加しました。

私はあまり興味がなかったのですが、どうしようかなと思いました。思ったので、参加することになりました。

まず初めに、ハンカチに書いてあるもようの上を、針でぬっていききました。次に糸を巻つけていきます。これは少し難しかったので、大人の人に手伝ってもらいました。そして、そのハンカチを水色の染料の中につけて染めました。しばらくして、染め終わった後、ドライヤーでかわかして、初めにぬった糸をほどこいていきました。糸をほどこく時、どんなハンカチができていくのかとても楽しみでした。最

後にアイロンをかけてでき上がりました。

六年 山本衣織

最初は真っ白だったハンカチが、絞って染めるととてもきれいなハンカチになっていました。初めての体験で、分からない所がたくさんあって大変だったけど、想像していた以上にいいのが作れて良かったです。

また、機会があれば、今度はちがうもようのハンカチを作ってみたいと思います。とてもいい体験ができたと思います。



運動会に思う

分館長 大森章弘

由良に育って今年の運動会で

私は何回楽しませていただいたのだろうか。あまり古いことは覚えていないが、わくわくする気持ちと、出場した種目で負ければどうしようかと不安に思う相反する気持ちで運動会に臨んでいったように思う。日頃の運動不足を解消しようと毎日走り出すのも運動会に出場するためであった。自己満足のため夕食の一時程度で三十分のランニングをしていた。三つのリレーに備えてのトレーニングであった。

お盆が済めば、自治会の選手選考会が公民館で行われる習わしであった。今年も例年にもれず自治会の役員は常勝三部だどやる気満々で選手選考がなされた。その気持は、前もって行われた「大縄とび」の練習会実施

にも表れている。

さて、二年ぶりの運動会は予想どおり三十度を超すかんかん照りの中で行われた。この運動会は由良地区にとって唯一、各地区民が一同に会して親睦を図れる催しである。幼稚園児から老人まで幅広い年齢の人々が集って運動会の競技を楽しめる機会である。日頃お見かけすることのない人を見かける唯一の機会と思う。それだけに毎年開催できないうらやまを感じる。きっと由良神社の祭礼のように立派に開催する値うちがあると思う。また、開催時期は厳しい暑さをさけて、そして小中高のスケジュールを考慮して、祭礼前後の日曜日にしてはどうかとの意見が多い。今まで暑さによる事故は発生してないが一考を要する。

また、種目を見ると、大分改善されて、よく走る者が勝つかどうかかわからない種目が少し増加したことは大変良かったと、三聞いた。今回は「ラムネ飲み競争」と「借物競争」が新たに登場した。これは良かった。

さて、私は楽しみにして参加した。三部の進行係を受持ち、他の係の方々と協力して各種目に欠員がないように、そして出来るだけ多くの方々に出場して頂くように考えてお願いする係である。大人はもちろん、小中学生の気持ちも考えて、お願いしたり、断ったりの任務である。高齢化が進んでいるといわれるが三部も若年層・青年層といわれる十歳台と三十歳台が少なく、四十歳台から上の年齢層は多く、特に六十歳台以上の多さを感じた進行の係であった。

他地区のかかわりについて感じたことは、どの地区も優勝をめざしており、どの種目にも欠員をださないように進行係が頑

張っている様子がかがえた。

二部などは応援で趣向を凝らし、三・三・七拍子の応援などで団結している姿が見て取れた。運動会後の焼肉を楽しみにということも聞いた。あとで聞いた話では「運動会がこんなに面白いものとは思わなんだ」との感想を若年層が言っていたとのことである。若い人にも面白くて魅力あるもの出来る、皆んなで十分楽しめる要素があると思う。しがし、三部の席の意見では(自分も同感)、一種目が終わって次の種目を開始するまで、時間が掛かり過ぎて間延びしてしまふということである。用具は準備出来ているのに、なかなか競技が始まらないことへの批判である。これは出場者が集合に遅れたのかもしれないが、出場者に競技説明等を前の競技と平行して済ませておけば、すぐに次の種目を開始できると思う。役員の皆様には大変お世話になり楽しい運動会をありがとう。

地区運動会を振りかえつて

竹田 成美

今年も、秋晴れの下、由良地区運動会が開催されました。

我が宮本地区は、ここ、何年来成績が振るわず「今年こそは!!」という意気込みで当日を迎えたのでした。いつもよりテントを一張増やし、士気を盛り上げるべく応援団長をたて、太鼓も持ち出し優勝目ざして準備は整いました。以前は、毎年行われた運動会も負担が大きいうことで二年に一回になりました。今や、年々、参加する若者が減少し由良地区全体も高齢化し、出場する種目も実年齢より若い種目に無理をして出場しなければならぬ状況になっていきます。特に、お年寄りの種目にあつては、いくら点数が加点されないといつても人間の心理上、競争となると年齢を忘れて無理

をして怪我をしないかと、声をかける方もハラハラドキドキしました。出場種目の再検討をしなければならぬ問題点はあるにしても一つの行事に向かつてそれぞれの地区が結束を固めて取り組むということは、人間関係を豊かにし、円滑に充実した日常生活がすぐせるものだと考えます。特に宮本地区においては、「今年はがんばるぞ!!」という気持ちが一つの競技種目一位をとったことで勢いにのり、次から次へと皆んなの気持ちが一致団結し、気が付けば団体競技十三種目中なんと九種目で一位となりました。こんな事はかつてなかったことなので、誰かが、「今年の阪神タイガースと同じやで」と言いました。おかしくもあり、うれしくもあり大変

楽しい気分です。思わぬ応援席では拍手が沸き上がりました。そして、なんといつても庄巻なのは、

四部対抗リレーでした。後でききました、なんと四十一年振りの優勝ということで宮本地区は沸きに沸き上がりバンザイ三唱を何度したことか。かつてないこの盛り上がり他地区の皆さんも驚いておられたと思います。運動会の結果は、惜しくも五点差で第二位ということでしたがマラソンに出場選手が少なく宮本の皆んなは、実質宮本の優勝だと実感しています。この運動会を通じて思うことは、気持ち一つでこんなにも楽しくお互いに理解できたり協力することの喜びを感じることができたことです。そして、何よりも年齢に関係なく一つの事に向かつて取り組めば喜びを共有できるということでした。二年後はどうなっているかわかりませんが、今回の準優勝については、次回に優勝する楽しみを残したとい

うことで二年後は、一層一致団結して完全優勝を勝ちとりたいと思っております。

そのためには、日頃から運動不足をなくし、日々、健康増進のために体を鍛え、プラス思考になり少しでも老化を遅らすよう努めたいものです。

最後に伝統あるこの運動会をいつまでも由良住民の交流の場、娯楽の場、そしてお互いの元気の確認の場とするために、次のことを提案し、私の運動会に参加しての感想といたします。

参加された皆様、お疲れさまでした。

一、運動会を楽しみましょう。

参加を苦痛と考えずに、まづ年長者が楽しみましょう。そうすることによって若い人の参加も増えると思います。

一、心身の健康に努めましょう。限り有る人生、楽しく行事に参加できるように、日頃から健康の増進に努めましょう。

“水の匂の分かった兵隊”

松寿会会長 山口 幸一

沖繩戦線でこんな想い出がある。

作戦初動の頃だが追いつめられた私達は、米軍がシュガーロープと名付けた丘の裏側のなだらかな斜面に点在する亀甲ガマといわれる墓地の中に潜り込んで、主力との連絡を絶たれ孤立無援のまま日没をまって斬り込みをかける、そんな怖い抵抗を繰り返していた。

食糧、弾薬の欠乏もさる事ながら、水の欠乏には耐えきれなかった。

そうした状況になると夜を待ちかねて二、三人の兵隊が水を汲みに行くのだが勿論命懸けだし、水を探してウロウロしているうちに精巧な探知機を持つ米軍に察知され待ち伏せ攻撃を受け失敗してしまった。

それでも水への欲望は絶ちきれずなんとかして水を、せめて一口をと、寝ても醒めても水ばかりで戦う気力も失せて夜も昼も墓の中でゴロ寝ばかりしている状態がつづいた。

そんな折り大陸戦線から配属されて来た一人の兵士が「俺が行ってみようかな」と言い出して、五、六ヶの水筒を肩に夜の闇に紛れて出ていった。

これで水にありつけるといふ期待もなく、みんな黙りこくって彼を見送った。

しかし、しばらくすると彼は水を満たした水筒を肩に帰って来た。みんなが驚喜したのは言うまでもない。

彼はそれを誇るでもなく、恩に着せるでもなく淡々としてそれを公平に頒つと、自分の居場

所に腰をおろし、「水の匂いが分からん様では」と呟いた。

水に匂いがあるのか、私は無雑作な此の呟きに驚嘆した。

次の夜も、そして其の次の夜も彼は平然として闇を利して水を運んで来た。

訊けば彼は速射砲手であり、しかも四番砲手であったという。知る人ぞ知る速射砲四番砲手といえは花の四番と称讃された花形である。

いつか私が「花の四番の水汲みとはバチが当たるな」といったら「航空隊サンにモグラになつてもらって居るのと同じですよ」と笑って居た。

彼の水汲みはつづく、そして私は決戦航空隊要員として内地に転送され、いつしか特別攻撃隊という凄惨な任務の中で彼の面影は私の脳裏から遠ざかっていった。

彼以外にも豊かな戦闘経験を駆使して難局に立ち向かっていった兵隊達を知っている。

それがどうして私に彼らを想い出させたかというところ現在の日本がまたしても危機に直面していると思うからである。

太平洋戦争を第一の敗戦とするなら、バブル崩壊後の日本経済の混迷は第二の敗戦であろうし、世情不安な現状は第三の敗戦かも知れない。

今更云うまでもない、現在の私達の置かれている立場は、前途に光明もなくむなしく滅亡を待つて居たガマの中の状態と変わりはない。

太平洋戦争の時、バブル崩壊の時、私達は何もしようとはしなかった。

長いものには巻かれる、だの出る杭は打たれるなどの日本式処世訓が大勢順応主義を跋扈させ、自分の身の安泰だけを追求する日本人を仕立てあげた。

自国のコーヒー栽培農家を守るため、フェアトレード運動を立ち上げたデンマーク国民の経験に裏打ちされた智慧を見習う

べきだ。

自分の町の商店街を守るため
大型スーパーをボイコットした
ヴェネズエラ市民を安物買いに
狂奔する日本人は考えるべきだ。

彼等は其の狂奔の後に来るも
のを経験から知っている。

どうしようもない日本と思う
かもしれない。だがそうではな
い、此の状態に奮起して声をあ
げる良識ある一群の老人達がい
る。毎日の新聞の読者投稿を読
むとい。

「其の国の政治は其の国民の質
のそれ以上のものでなければ
それ以下のものでもない」とハ
イデガーの政治哲学の起源の一
節を持ち出して、国民は選挙権
の行使をもつと慎重にしようと
訴える八十三才の女性がいる。

少年犯罪の増加を憂うるなら
政治家、高級官僚、企業トップ
に襟を正せと叫ぶ八十七才の老
人がいる。

「戦国の身の振り方を今に見せ」
川柳に託して某政党総裁選にお

ける議員の混迷ぶりを嘲笑する
老人もいる。

ケインズ理論に傾注する日本
経済の行く末に疑念の声をあげ
る市内在住の老人もいる。

それを憐れい抵抗とは言うまい、
彼等は真水を嗅ぎ分ける真水の
匂いを知る老人達なのだ。長寿

おめでとうなどと云われてノホ
ホンと構えて居れる時ではない。
日本の将来を担う子供達を育成
してゆく事こそ大切な事なのだ。
それにはどうすればいいのか、

私達がひとしく味わって来た苦
い体験を生かす事だ。

残り少ない人生を、真水の匂
いを嗅ぎ分けて、精一杯次世代
のために捧げようではないか。
それがなにもしてこなかった、
なにもしようとはしなかった私
達世代の贖罪ではなかるうか。

永平踊

中西満さ子

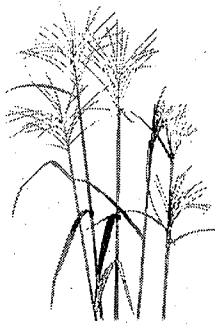
郷土色豊かな、由良の永平踊
アーエイハイヤーエイエイエへ
揃た揃たよ
踊り子がそろたソレシヨ

稲の出穂より よくそろた
アラ よくそろた

十五年程前までは公民館活動
として盆踊行事が取組まれてお
り、由良の里センター前広場で、
ゆかた姿の婦人会の方々が踊を
盛り上げ大勢の人達の参加で尚
一層大きく輪を広げ、なごやか
な雰囲気でした。が年々その盛り
上がりは欠け、近年はその行事
すら予定されない事態になって
おりました。この事については
皆様も一抹の淋しさを感じて居
られた方もあると思います。
由良の歴史をさぐる会の小谷
一郎さんから聞くと、ころにより
ますと、永平踊は古代の念仏踊

りから取り入れたらしく、相当
長い歴史をもっているがその記
録は残されていないとの事です。

又、丁度その頃森田くまさん
(九十七才)に永平踊の事でお
話を聞かせていただく事が出来
ました。「永平踊は私らの子供の
時から盆が来ると男も女も子供
も浜へ出て踊ったものやで……
そしてほとんどの人が化けて(仮
装の事)楽しんで踊ったで……
歌は年寄りの歌声に合わせて知
らずしらずに覚えたし踊も、身
振り手振りを輪の中に入って真
似ている内に覚えたわ、そして
男の人は女に化ける人が多かつ
た。私も子供だった家が家の人
が手伝ってくれて化けたで……
浜で踊ったあとは、皆、寺の門
(境内)へ行って踊ったものや
で、その内に東の空の方がしら



じらとして夜明けを思わせるようになると踊も終わったものだったナ……今ほど娯楽が無かったでかなーでもよい先祖供養やっただで……森田のおばあさんは明るい表情で目を輝かせて語って下さいました。

そこでこの永平踊について私達有志者が七名程集まり話し合いました。まず何とか復活を図り定着させる為には、保存会的な活動として地域の皆さんに呼びかけをしてみようと相談出来たものの、力不足の私達の事で不安もありましたが、まずは意を尽くして呼びかけ続けよう、事を始めなければ結果は出ないからと励まし合ったのでした。

一回目の練習日は約五十数人、二回目は七十数人、三回目は同じく大勢の人達の集まりで体育館一ぱいの大きな輪に私達はただ嬉しさのあまり胸のジーンと熱くなるのを覚えました。そして歌の方は希望もあり十二人程で、永平踊専属歌手です？……

そこへ三味線、太鼓も加わっていただき立派な出来ばえです。

何しろ永平踊の楽譜もないのに絶対鳴り物入りでやりたいから何とか考えて……と無理をお願いしたのでした。さすがの好調子に歌声も若々しく乗りも良かったようです。永平踊のユニークな歌は、今は亡き大先輩の方の歌声がテープに録音してあったからこそ参考にして練習ができたのです。

皆様方の大きな結束の結果が八月二十四日の子供地藏盆に、飯沢公民館長の計らいで発表の場を与えていただきました。

又、九月の敬老会にも北野自治連合会長から永平踊を披露してほしいとの依頼があり皆さんをさせていただき、あの敬老会会場で皆さんに喜んでいただきました。有難うございました。

娯楽が多様化している現在ですが、こうした永平踊は由良地域が生んだ文化です。老若男女

の輪の中から温もりや豊かさも生まれてくると思います。

踊の練習日も秋の深まりと共に寒くなり、あと、一、二回程度になります。来年のお楽しみ……となる事と思います。その時は男の方々も若いお母さん方も、はじめての方もこそぞって参加して下さい。ゆっくり教えまします。すぐに輪にとけ込めると思っています。この永平踊をみなさん一人ひとりが時代を超えて受け継ぎ後世に引き継いで行きましよう。

あとになりましたが、公民館、自治会、各団体のみなさま方のご協力有難うございました。今後共、お力添えをお願い致します。



すばらしい由良に住まわさせて頂いて

伊達壽賀子

初めまして。縁合ってこのす

ばらしい由良に住まわさせて頂き丁度一年になります。何故かしら母の念願の土地です。私の実家は太田町口大野です。通院で舞鶴の病院によく由良の道で車を通ったのですが、奈具海岸が、私にしては難所なので、いつも通った後のホッとした気分とか通る前の助走の心構えの場所なので由良の地に足を踏むことはあまりなかったのですが、住まわせて頂いて、何かにつかしい昔を思い出す、あたたかい思いになるすばらしさに感動させられました。まず一番に感動させられたことは、子供さんの元気な挨拶です。とても嬉しい気分させられました。今でもこの感動は、心の隅に人間として何か忘れてた心をあたたく

包んでくれます。一瞬、心が

明るくなり、ウキウキとさせられました。由良の家のあるところにポスターが貼ってあり、見ると挨拶運動の推進の言葉がよく目につきました。地域ぐるみの挨拶運動の成果の証なのだなぁと感心させられました。又、大人の方も、すれちがう時、気持ちよく挨拶をして頂きます。心がとても安心させられます。会社とか学校の中で、辛うじて挨拶が実践されている昨今ですが、地域ぐるみの挨拶運動は、今の時代とても貴重な宝物に出合ったような思いにさせられるぐらい感動させられました。本当にすばらしいです。世の中、いろいろと子育てが難しい時、由良の子供達は、心が純真でのびのびと育てられており、テレ

ビや新聞紙上で話題になっていくことは、別世界の出来事しか見えません。いつまでも素直な子供達が育っていくことを願って、私も率先して、挨拶をさせて頂いております。

また地域ぐるみのいろいろな行事がよく考えられていることにも感動させられます。由良岳登山も今年で三十七回目と言われビックリさせられました。初めて参加させて頂き、幼い子供さんから、老人まで三世代の方達が、仲むつまじく登られる姿がとても鮮明でした。ほほえましい光景が多々有り、こちらの心があたたかくなりました。中学生や高校生が地域の行事に参加することが少ない時節なのに、元氣よく登山される姿をみさせて頂き嬉しくなりました。昭和四十一年頃から続いているのだなあとわかり改めて歴史の長い行事なのだかわかり、こうして伝統を大切にされていることは、とても地域の方の心のゆとりが

なかったら守っていけないのに、一言で三十七回と言われますが、当事者の方の御苦労の賜物です。来年は友達を案内して、楽しませていただきますのでこれからもよろしくお願い致します。

今年も、二年に一回の区民運動会があり、学生時代より久しく遠のいていた運動会を楽しませて頂きました。この世知辛い世の中に、地域の方達が一つになつて老いも若きも一家総出で楽しむことは、私になつかしい子供の頃に戻った思いにさせられました。役員の方達も一生懸命に働かれて、見ていてとても気分が良く由良の人達は、心から何事にも真剣に取り組みをされ、その姿を、子供達が手本にされるので、どの行事でも役割分担が明確にされ守られていく秘訣がわかりました。このようになすばらしい土地に住まわさせて頂きとても光榮です。二年後の運動会楽しみにしております。すばらしい由良に一年間余り住

まわさせて頂き、その中、いろいろな行事に参加させて頂く中で、多くの方達と出会い、いつも暖かい心で包んでいただき、私の心はすっかり癒されました。心から笑え、楽しい人生をこの由良の地で味わえることができました。この由良に住むまでは、心の病との闘いで、病院と薬に頼る生活でしたが、すっかり縁がぎれました。これからは楽しい人生を送る自信ができました。またとても毎日安心して暮らしております。地域の方達の暖かい心のぬくもりが、行事毎でわかり、私の心を癒してくれました。由緒有る由良に住まわさせて頂き私には由良は第二のふるさとして、誇りです。由良の皆様方、幸福の光が由良由良と地域いっばい拡がってゆく事を祈りつつ、これからどうぞよろしくおねがい致します。

芸術を楽しむ心裕かなる
人こそ天国に住めるなりけれ
由良の人心あかるく



あたたかい
由良の地は自然がいっばい癒される
由良の海心が癒され 洗われる
由良の山大きな心 見守られ
由良の子ら心すなおで 皆元気

旅は気儘に パート10

丹後由良ターミナルセンター

夏らしくなかった今年は、九月に入って真夏の状態でした。四月の由良岳登山にはじまり、今の時期また登山の季節です。金、土曜日になると、リュックに登山靴、列車であり、乗り合わせの車であり、大型バスであり由良岳って本当に有名なんだなあといつも感心しています。

ほとんどが、年配の方に思いますのに、涼しい爽やかな顔で降りてこられるのに、またまた感心!! きつとあちらこちらの山を征服されてきたのでしょうか。次また違う山を登ろうと思われすごいパワーを感じます。

声を掛けたりしなくても、顔を見てみると、満足気な姿がそこにあります。一年という季節の中で、考えてみると、登山、海水浴、みかん狩り、カニと温泉、すべてが出来てしまう丹後由良です。現在の由良駅の乗降は、平日の午前七時三十分〜午後五時三十分の間八十人〜九十人くらいです。学校のない土、日、祝等は、半分くらいになります。カニ、海水浴等の時期はそこにプラスアルファとなり、いろいろな事に変化が出ます。

観光的な問い合わせ、宿泊の問い合わせ等も時期によって随分な差があります。『こうであった方が良いのでは?』などの指摘等もあり、外から見た意見を止めない様にしないといけないと思っています。今この原稿を書いているのが、切ギリギリの十月十八日(土曜日)です。窓口から、『すみません』と男性の汗いっばいの赤い顔。ハクレイ酒造にはど

う行くのですか?でしたので外に出てご案内したのですが、背中には大きなリュック、他の女性の方お二人も小さなお身体に大きなリュック!この天候で由良岳、本場に最高でしたー!!
 そして、十五時五十分の列車に乗ります、でしたので、良かったら大きなリュックを見ておきましようか?と言うと、喜んで行かれました。きっと、あと三十分もすると駅に戻ってこられるでしょう。私は、原稿内容に少々こまっていましたがこの方達につられて、ペンが進みました。あつ!帰ってみえました。
 土曜日で、団体さんがいっぱいでしたと、まだまだ、汗いっぱいの赤い顔のままです。その中の女性の方、登りは、一時間十五分で登られて東峰でお弁当を食べて西峰からお降りてきましたと、爽やかに言われました。やはり、あちらこちらに登っていられます。これだけが取り柄ですと、デイスカバリーの快速



車両に喜んで三人乗り込まれました。京都市内からのお客様でした。また今日もパワーをもらいまして、なんとかギリギリの原稿を書き終わらせていただきます。最後になりましたが、今朝も八時〜十一時までの間、環境推進グループの方々による清掃で、さっぱりして、今日の天候の様にさわやかホームにしてくださいました。本当に心から感謝致します。新しく延びた高速によつて、流れが変わりましたが、一人でもたくさんのお客様が来て下さるとうれしいと思います。

『由良座』の活劇文化を享けて

濱野路 大 森 孝

昭和二十六年ともなると、梅田^だ“^か界隈は戦災の跡も見出せないほど復興を遂げていた。

がないと置いて貰えなかった」と上廻った。

そのあとへ復興の足どりを信じながら、阪神間の西宮市の高等学校へ、人生・教師、社会人として初めて乗り出した。希望に膨らんで旅立ち。

それで、四、五、六の三カ月で、西宮市弓場町^{ゆんば}の屋根裏部屋に住むだけということになり七月からの生活が始まった。由良で住んでいた時には、想像すら出来なかつた貧乏暮らしであった。これが、おくれればせながらとり返しにかかった青春の権利と欲びの姿であった。一方では教師としての、準備も必要だったし、さらに研修も求められた。日々が苦しみと、絶望と、虚勢の坩堝の中で、何とか喘ぎ喘ぎ消化して行つたように思う。緊張の連続であった。

尼崎市内、『出屋敷』地域にも一年程住んだが、まだ焼け跡、闇市の気配のする、大衆飲食店街が賑わっていたことを眼のあたりにした。けれども、何とかして敗残のバラック文化の中で独りで生きて行かねばならない。贅沢^{ぜいたく}は言っていられない。兎も角昭和二十六年四月の一ヶ月の俸給は六千三百円で、吹田市の千里山の下宿への支払いは、一ヶ月七千円(由良の実家から米一斗と残りの七百元を親の仕送り

そんな苦しい中で、一つ癒してくれた楽しみが、梅田にあった。その頃(昭和二十六年七月)

梅田界限には、梅田劇場（いわば梅新側）とすぐ近くに北野劇場があった。私が梅田劇場に足を運んだきつかけは、職場の先輩Aが『招待券』をくれたことに始まる。彼は英語を教えていて、同じ一学年の担任団の一人でもあり、彼Aは『床が変わったら、眠れぬ。』と言いながら、私に学校の宿直をたのんできた。妻子持ちの彼にとつては、『ポツと出』の独身の私は、恰好の宿直要員と映ったのかもしれない。私は都度引き受けて宿直を勤めたので、A氏は梅田劇場の招待券を続けて、与えてくれた。楽しみがすくない、独身の『ポツと出』の若者教師を哀れに思つて、自分の所へ入ってくる、入場券をお礼のつもりで廻してくれたのだらう。心の優しい人は必ず、どこにでもいるものである。

土曜日に、梅田劇場に行くと、大勢の都会の人出に先ず庄倒される。みんなが恰好よくて、自分かひけめを感じて仕方がない。財布の中味も乏しい。ともすれば自信を失いかげながらも、『やるっきゃない』と学生時代を送った広島市での市民体験を思いおこして、踏んばって行く。でも大阪市は市民の雑踏が、広島市のそれとは又大きさが違う。一寸応えるね。

公演はその頃、女性演出家？豊原某の演劇が、うけていて（ロング・ラン）、由良座のような『きり狂言』はないものの、大衆演劇に出てくる股旅姿で三度笠と合羽をもった『瀬川伸』の流行歌とショーが未だに忘れられぬ。

《ここで少年時代に由良座の『きり狂言』公演で味わった、いわば原体験のようなしみしみとした感情が湧いて来た。》瀬川伸はいつも『上州鴉』を手ぶり身ぶりを交えて歌うのだった。その一番は、

詞『銀の朱総に罅を追われ
旅を重ねた上州鴉』

何のこの世に、何のこの世に
未練はないが、
一度行きたい、一度行きたい
母の里。

《因みに瀬川は現在の瀬川瑛子の父君である》私は決して、歌手のファンではなかったが、今にして思えば、田舎の由良を出て、大都会大阪で、友人とよべる者がいない、孤独な若者の私にとつて、救いと慰めを与えてくれたのは彼の股旅姿と名月赤城山の雰囲気、故郷由良恋しの情緒と通じたのかもしれない。この鉄壁のような重く分厚い都会ぐらしでのカルチャー・ショックを、私は切り崩し、突きぬけて行くのに、大阪へ出ては、梅田劇場で瀬川伸の股旅姿の歌謡ショーに期待し、依存し、これを媒介として、大阪市での社会生活の入場券としていたと言えるかもしれない。《阪神間三年に互る寂しかった生活は、そのあ

と京都市へ転じたら一変した。友人、知人が京都市には多くて、癒されることも比較にならぬ程多く、孤独感は急に減って行くのがよく判った。》

そこで、思うのは、全国的に較べても狭くて小さい愛する由良を後にして、大阪のような知己の乏しい大都会へいきなり赴任する時は、激しいカルチャー・ショックを味わう。その時に、克服して行く準備が必要になる。一般的には幼少時から都市文化なり都市の社会手法に慣れ親しんでおかねばならぬと思う。これは由良に生まれ、由良育ちの御同輩が避けて通れない麻疹のようなものであるか。人それなりの回復方法はあるだろうが、私はお芝居の『きり狂言』の文化（由良座の演劇文化）を思い出すことで切りぬけることが出来たみたい。それだけに『由良座』のはたしてくれた功績を多としていく。

七十四才を迎えてしまった今日、宗五郎の石田良輝さんの演劇文化を支えた役割とその意義について、重くうけとめないわけにはゆかないのでした。

はまのこナーサリー

中西将子



毎週木曜日、里センターへ十時になると、子供達が集まってきました。まず最初におはようの歌、そして一人づつ名前呼びをしていきます。はずかしそうにしていた子供も回を重ねるうちに名前が上手に言えるようになっていきました。返事が出来るようになってきます。みんなで拍手で誉めてあげます。次に手遊びをします。げんこつ山のためきさん、アンパンマンなど今ではレパートリーも増えました。そして次に親子でリズム体操。音楽に合わせて、親子で体を動かします。又、座ぶとんに子供を乗

せてリレーをしたり、座ぶとんとりゲームをしたり。子供はみんな大好きです。図書館からは団体貸出しを受けているので、本や紙芝居を親が交代で読み聞かせをしています。やっぱりアンパンマンが一番人気です。そして最後はさよならの歌を歌って終わります。

天気の良い日には児童公園で遊びます。春には由良駅前の桜を見に散歩をしたり、夏には浜で水遊びや虫採りも出来ます。そしてたまにお弁当を持って遠足に出掛けます。又、由良の中心だけでは遊ぶ友達も限られてく

るので、もっとたくさんの子供達と触れ合ってもらおうと、宮津でやっておられるサークルへ参加したり、子育て支援センターへ遊びに行ったりしています。それに遊ぶだけではなく何かに役立てばと、宮津消防署にお願いして応急手当の講習会をしていただきました。

年々由良でも子供の数が減っています。もともともっと増えてにぎやかになって欲しいと思います。これからも「はまのこナーサリー」を続けていきたいと思



短歌



坂本 妙子

悲しみを秘めて語らぬこの海の想いは彼方北朝鮮にあり
朝あさに向かう鏡につくづくと皺の深さをわが思えども
彼岸花群れる夕暮れ唯一人乗せてローカルバスは過ぎゆく

山口 幸一

大森美智子

吾が祖国日本の未来子らにみる 飢えず悩まず漂う如く
冷や酒の酔いはしずかにまわり来ぬ 体制批判は敗者の論理か
較ぶれば異文化の中に生きるようマイノリティーか老いたるかわれ

炎天に燃えるカンナの通学路二学期の子らは澆刺と行く
教わりて植えしじゃが芋上出来で初心者われを慰めくれる
馴れしかと問いくれる人ありて今独り身の波がひしと寄せ来る

山口 美子

大森萬喜子

生きる日が過去となりゆく夕ぐれに熱き茶を入れ湯気をつめる
腰いたく無為に過ごせし終日は草の勢い止めてほしきを
真夜に見る火星の光やわらかく宇宙の神秘にふれたる思い

垂れ咲く紫式部白式部広がれば庭は万葉の里
川田ゆく一人の農夫ひと穂ずつ拾いて歩く 胸つまりたり
子らの打つ太鼓の撥に合わせいる米寿の女の手の動き佳し

山田 よしの

藤本 史代

携帯の電話のようにわが言葉君に届けと仰ぎ見る空
亡き夫がこの世覗けばコンバイン・パソコン時代と驚くばかり
亡き夫がこの世覗けば犯罪のただに多きを嘆きて止まん

ほろほろと秋の愁いの詩紡ぎ庭の白萩こぼれて止まず
日常のはしばしにと現るる姿なき人と白萩愛する
深き眸に見つめられつつ語らうも今は早なし萩散るばかり

とよ子

中西 夏江

酷暑なく梅雨明けもない庭の角白きコスモス一つ咲きいる
何もかも狂ってる様な夏逝きて鈴虫の声しずかに聞きぬ
作者不詳なれど継ぎ来し「永平や」輪は盛り上がる踊りゆたかに

単純に吹かれつつ行けば今生のひとつこころに匂う木犀
風は照らす風は翳なす幾葉が風に匂いて樹下にま紅し
風は遊ぶ薄にあそぶ月の夜をこころ遊べと光りつつ吹く

私の冠島

四方俊一

遙かに遠い半世紀前、真夏の太陽がざらざらと照りつける熱い砂浜、その砂浜は多くの海水浴客で賑わっており遠く沖には大島小島が浮かび空は青く大きな入道雲が立ち上がっていた、真つ黒に日焼けした少年四人は波打ち際で半身を海水に浸りながら将来の夢を語り合っていた。

時は昭和二十六年(一九五二)の夏、何鹿郡組合立何北中学校の仲良し少年が泳ぎに来ていた、戦後の混乱から復興へと移り変わり漸くにして落ち着きを取り戻して豊かでは無いが何とか生きていける時代であった。汐汲浜で仲良し四人の少年はやがてそれぞれの進学路をとり自らの夢と希望を達せんが為学び舎を巣立っていった……。

私の生まれた里は南も東も北

も山、山又山の中、西は遠く三岳山を望み夏以外は丹波霧に包まれた山村、明けても暮れても目の前の山の景色、大声で叫べばたちまち返す「こだま」、「こだま」が「こだま」を呼ぶ谷間の里から数年後、一少年が成人して再び冠島をのぞむ所に来た、若狭湾を望む所に来てみるとそれは素晴らしい景色である。広く爽やかな海原に浮かぶ島、快晴で空気の澄み切った時は島がクッキリ見え遠く越前岬まで見る事が出来、その日その日の天候によつてその表情が変わる深みのある島である。橋立、日置浜、里波見の浜、大島浜、成谷の岬、世屋、由良浜から、又、伊根から、舞鶴から天候が良ければ何時でも見られる、だが由良の浜から見る冠島は落ち着い

た穏やかな島に見えると共に若狭湾の真中に見える島、何と素晴らしい景色。百五十年前は由良湊として栄え北前船が北から西から出入りして栄えた湊、全国の湊の中でも船の出入りの多い湊として、中丹、南丹まで物資を運んだと云う由良川船運の湊、その船荷は由良の塩、素麺、北海道からの海産物が中丹へ上り、中丹からの雑貨物が由良湊へ、当時の繁栄ぶりが目蓋に浮かぶ深い歴史を秘めた由良川河口、そこに「安寿と厨子王」蜂子皇子の物語、「万葉の歌」にもある歴史豊かな町として、この地域は発展してきた。又、みかんの花咲く田園の里、魅力有り素晴らしき由良の町である。宮津に来て漸くの想いで得た地が由良港、そうそう由良の浜で夢を語り合った少年時代から半世紀、本当に永い道程であった、当時の少年は夫々社会で活躍し今は年金生活を送っている。

来年は白髪の老人四人が由良

の浜で若き日を回顧する事になっている。その港の我が家からは河口、舞鶴湾に出入りする船、北海道からの真つ白なフェリー、博奕岬灯台、冠島、若狭湾と眺望良く、四季の変化に応じて様々な海の変化が眺められ、河口で竿を振舞う釣り人、しかし週末になると静かな河口は水上スキーのけたたましい騒音の場となり安息の夢が破られる。特に昨今は各地で水上スキーの規制が厳しくなった為、由良河口は水上スキーの天国である。

夜になると槇山から静かに昇る名月、川面に輝く月明かり、沖の漁火を肴に地酒を汲み心ゆくまで酔う。

朝、目が覚めると冠島を見て今日の天候を占い一日の励みとなる、有る時は霞み、有る時は雨に隠れる島、「冠島」、今日の一日を感謝し、由良の郷に感謝し明日の一步を微睡み粗筆を置きます。

平成十五年十月十日

由良の地名 その八

小谷 一郎

前号で北野天神社の地域に、菅原道真を祀る北野天満宮が造られるところまでを書きました。

この北野天神社というのは、菅原道真とは全く関係のない農業の神であります。其処には、当然、由良の場合と同じように牛頭天王が祀られていたのです。そして、菅原道真を祀る神社――北野天満宮――が造営されるようになるのは、道真の政敵である藤原時平の系類が衰えて、弟の藤原忠平の権威が確立される天慶年間(八七七―八八四)になつてからのことでした。

天満宮の祭礼は、夏の祭礼に引続くように秋の祭礼があります。この秋の祭礼は収穫の祭礼であり、「瑞饋すいぎの祭」と称えられ、神輿の屋根を「ずいきの葉」で葺いて飾ります。この様は全く、

天満宮を祀る以前にあった北野天神社の祭りをその儘に伝える農業の神である天神―牛頭天王―の祭でありました。一方、夏の祭りは、境内の神々―例えば橘逸勢、淳和天皇、伊予親王、崇道天皇らの御霊―も祭られ、天慶元年(八七七)に催された北野御霊会の古いしきたりをも伝えられているのです。こうして、菅原道真は天神となります。

由良の天王山に祀る牛頭天王は、天の恵みの水を与え、農作の敵である夏の病害虫を払う農業の神、天神でありました。その天王山に城を築くことになり、牛頭天王は里に降ろされることになりました。それは何時の頃から明らかにする史料はありません。「嘉永五年(一八五二)二月」筆録の「田辺旧記」に領内城跡

として記しているのを見ると、「由良村 駒沢主水」があります。しかし、この駒沢主水という人物に関する史料はありません。何時の頃、この城があったのかも分からないのです。この記載はどんな原史料に基づいてされたのが明らかにされていないのです。

延享三年(一七四六)正月指上の「綿考輯録」によると、細川藤孝らが丹後に攻め入った天正年間(一五七三―九七)には「大島対島守・中山李之助か由良城」があったことを記されており、この大島対島守は、天正三年八月、織田信長の越前攻めに「丹後より働きの衆 一色殿・矢野・大島・桜井、数百艘相催し、幡首打立々々、浦々、湊々へ上り、所々に烟を挙げられ候。」との中に出てくる大島がそれです。この大島(大志万)という水軍の大將の城であったことが分かります。「信長公記」

王は、それからどうなつていったのでしようか。

万延二年(一八六一)正月編さんされた地誌「丹後国加佐郡旧語集」(「丹後資料叢書」所収)の由良の項にも、それをうかがわせる記載がありません。

それより古い享保年間(一七一六―一七三五)の文書―さきの旧語集編さんの資料になるべきものではありませんが、その内容が余りにも山椒太夫伝説に片寄りすぎていたため、採り上げられなかったのかも知れませんが、その内容を見てみます。それには「北向御前と云ふ宮、安寿姫の官成と云伝るや」と記されているのです。安寿姫らは北の方向、岩木山から由良に来たのであり、怨みを呑んで山椒太夫に命を奪われた安寿の魂は、故郷の岩木をのぞんでいたにちがいないとして北向きに祀つたようにされたというのでしよう。牛頭天王を祀る祠が天神社であったことは、東山の八坂に、

播磨の広峯天王社から牛頭天王を勧請して祀った祠の名称が、「祇園天神堂」であったことは、明らかですが（国史大系本「日本紀略」）、広峯天王社が広峯天神とも称していたのであり、それに従って、各地に祀る牛頭天王が天神として祀られていたのです。祇園天神が祀られた頃には北野に天神社がすでに祀られており、その地域に承平の頃になって菅原道真を祀る「北野天満宮」が造営されたのです。その祭りの主体も、学問の神、菅原道真になって行き、天神さんと言えば道真であり、本来の農業の神の天神の色が薄らいで行ったのでしょう。由良の天神である牛頭天王も山からおろされて、祀られ方も、東崎の人々から祀られ拝された農業の神であった本来の力を失い、山椒太夫の説話と結びつけられて、安寿姫の御霊として祀られるものとなったのですが、その本来の形としての「北野天神社」は存在してい

たので、その北野という名字が、女性を示すものとして、山椒太夫説話の女主人公である安寿姫と結びつけられるということになったのだと思います。

江戸時代の由良は、北前の船頭の村であり、読み書き算盤を習うことは欠かせないことでした。天神さんは農業の神であるばかりでなく、学問の神である天神さんとして、どのように迎えられるのでしょうか。

此処は何処の細道じゃ

天神様の細道じゃ

どうぞ通して下しやんせ

御用のないもの通しやせん

この子の七つのお祝いに

お札をおさめに参ります

行きはよいよい

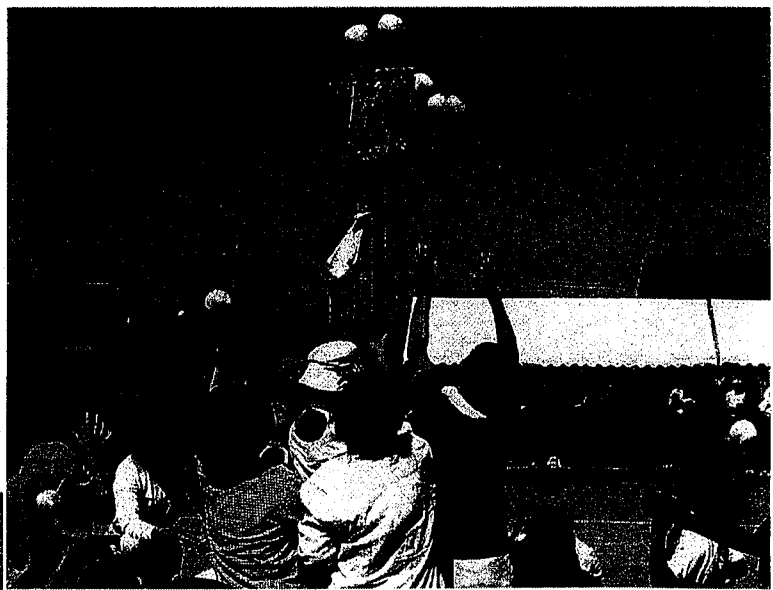
帰りは怖い

怖いながらも通りやんせ

通りやんせ

と、何故「こわいのかな」と思

いながら、首をかしげています。
(平一五・一〇・一九稿)



標語

朝ごはん

しっかりと食べて

元気な子



がんばったね

はげましひとりで

のびていく

遊んだら

最後にキチンと

おかたづけ

由良幼小PTA母親委員会

編集後記

千客万来、今夏は庄内由良から訪問団を受け入れ、小学校や関係する方々の歓迎、心が通じたでしょうか。

十月末日には、福井県若狭地区公民館連絡協議会から、由良地区公民館の研修視察があります。が交流を図ることで今後の活動の糧にしていきたいと思えます。

若い頃に見た冠島、そして現在の風景に想いを寄せる投稿をいただきましたが、いつまでも美しい自然と環境を守り、次代へ引き継ぐことは私たちの責務だと考えています。

踊保存会の皆さん、ご苦労さまでした。本当に大切な文化の継承ですから益々の盛会を祈念いたします。

公民館だよりを発刊するたびに文化部員一同、皆さんに読んでいただける、「公民館だより」を目指して頑張っています。

(飯澤)